

海外電子メール通信の英語教育への試み

小 堂 俊 孝・小 林 貢

English Education through E-mail Exchange with Overseas Students

Toshitaka KODOH and Mitsugu KOBAYASHI

(1999年11月30日受理)

We held the course in Liberal Arts Seminar of 1998, titled “Let’s make an e-mail exchange with people in foreign countries”, with the attempt to apply e-mail exchange to English education. The aims of the course were to promote students’ understanding of foreign culture and their ability to express in English and gather information from what overseas students write in English.

This paper reports this course, in which we practiced the e-mail exchange with students in a US high school, and discusses, based on the questionnaires, how well our goals were achieved through this project.

1 はじめに

本校では平成8年3月にLANを設置、同年6月に運用を開始し、同時にインターネットとしても利用可能になった。筆者らはインターネットの英語教育への活用という観点から、平成9年度には文科ゼミナール開設授業の一つとして、ホームページ作成を通しての自己表現能力向上を目指した。また平成10年度には電子メール通信によって異文化理解と自己表現能力の向上を目指した授業を行った。

本論では平成10年度に開講した「e-mail で通信しよう」の報告とその成果をアンケート調査を基に論じる。

2 電子メール通信の意義

文科ゼミナールの内容を決める際に、海外の学生との電子メール通信を英語教育に活用する意義を討論した。ここでは概念的意義と実践的意義に区分しまとめる。

概念的意義として、まず第一に「英語をコミュニケーションの道具として認識できること」があげられる。海外の学生と英語で電子メールを送り合うことによって、英語が学習の目的から通信手段という言語本来の機能を持ったものに変化するのである。

次に「実際の英語との遭遇により情報伝達の本質

が理解できること」が挙げられる。学生が普段接する教科書や参考書の英語は文法的にもスペリングの点からも誤りはなく、内容も申し分ないものばかりである。しかし実際に使われている英語には文法的な誤りもあればスペリングミスも存在する。筆者らは学生がそのような英語に接することによって、言語を使用する上で大切なことは「文法的な正確さにこだわり過ぎること」ではなく「情報を伝達させること」であると認識させることができるのではないかと考えた。さらに英語に対してもっと気軽に構えるべきだという気持ちを持たせることができるのではないかと考えた。

第三に「自分を英語で表現する明確な動機付けが与えられること」である。このプロジェクトは基本的に1対1の関係で行われる。自分が書かなければ誰も助けてはくれないし、誰も情報をくれない。このような状況に学生を置くことで英語学習へ自主的に向かうと期待した。

第四は「異文化理解の向上」である。ネットワークはコンピュータを結んだものであるがそれを使うのは人である。つまりネットワークは人と人とのつながりに発展するのである。しかも異なる文化に属している人とのつながりを可能にするのである。それゆえコンピュータの向こうにいる通信相手を通じて、通信相手のみならずその人がいる国や文化までもを学ぶことが可能になる。

第五は文科ゼミナールの目標からみた意義、つまり「実践型教育」である。電子メール通信は自分で調べ、考え、実行することが要求される。個重視の教育ができるのである。

実践的意義としては3つ挙げられる。第一に「送受信の即時性」である。インターネットが普及していない時には、文通によって海外とのやりとりを行っていた。しかしこの方法では時間がかかり、郵便事情によっては配達されないこともあった。ところがインターネットでは電子メールを短時間のうちにやりとりすることができるようになった。

第二に「自分のペースで伝えたい内容を考えることができる」という点である。例えば、英語会話ではすぐに伝えたい内容を英語にしなければ、会話は成立しづらい。ところが電子メールでは辞書を使う時間がとれ、参考書で調べる余裕ができるのである。さらに相手に伝えたい内容を入念に推敲できる。

第三は「自分のペースで相手が伝えたい内容を理解することができる」という点である。英語会話では相手の内容をその場で瞬時に理解することを求められる。ところが電子メールでは相手の言いたいことが一読して分からなくても、理解するために様々な手段をとることができるのである。

3 授業「e-mailで通信しよう」

ここではシラバスと授業実践を報告する。

3.1 シラバス

まず、最終的な目標「自己表現能力及び異文化理解の向上」の達成のため、以下の4つの目標を学生に明示した。

- (1)インターネットの概念を習得し使いこなせるようになる。
- (2)電子メールを送ることができるようになる。
- (3)電子メールを使って情報を獲得することができるようになる。
- (4)タイピングがブラインドタッチでできるようになる。

またシラバスに関しては、年間を大きく3つに分けた。タイピング練習を重視する期間、電子メール通信練習期間、海外通信期間である。

タイピング練習に関しては平成9年度には自主練習に委ねていたところを改め、授業毎に課題を与え、また各パソコンに練習用ソフトウェアを入れておき

随時練習できるようにした。

次に電子メール通信練習は学生と教官が英語で行い、電子メールの基本を習得できるようにした。お互いによく知っている教官と学生のやり取りは避け、他の授業では交流がない教官と学生の組み合わせにし、自己紹介から始めても不自然にならないように配慮した。

最後に海外通信は、海外に通信相手を見つけその相手の文化を理解することを目的とした。夏休みまでに相手校を探し、学生にはどのような情報を得るか、そのためにどのような質問をしていくかを考えさせ、夏休み後に実際に海外通信を始めるという予定であった。

なお、海外通信で得た情報はレポートとして提出させることとした。

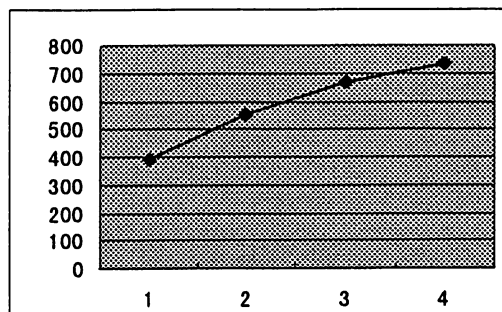
3.2 実践

このセクションではシラバスに対して実際に授業がどのように進展したかを説明する。

3.2.1 タイピング

当初はシラバスどおりであったが、海外通信を始めてからは時間がとれずタイピングソフトで自主的に練習することにした。

10分間の計測を数回行った上で、全員の平均ストローク数をだし、グラフにまとめた。計測時期は4月、6月、12月、2月である。



1回目の平均は390、2回目は555、3回目は670、4回目は733であった。この数字は十分に速いものではないが一年間で着実に向上したと言える。

3.2.2 電子メール練習

クラス36名を半分ずつ担当教官2名に振り分け、英語での電子メール通信を行った。この練習は海外通信を始める直前まで行った。

この練習では学生の文法的誤りは直接的には指摘せず、情報交換としての意義を尊重した。さもなけ

ればメール交換が文法指導となってしまうメールの意味が失ってしまうからである。代わりに学生に誤りを気付かせるために、教官からの返信には学生の誤った文法事項を正しく取り入れた文を入れるように心がけ、文法の誤りに気付くよう配慮した。

3.2.3 海外通信

3.2.3.1 相手クラス

6月頃からメール相手検索のホームページ (<http://www.epals.com>) でさがし始め、申し込みのメールを数校に送ったが、全く返信がなかった。そこで7月に同じホームページにこのクラスについて掲示し電子メール通信の申し込み連絡を待つことにした。海外の学校が新学期を迎える8月下旬頃から9月中旬にかけて申し込みが4, 5件あり、最終的にアメリカ合衆国ウェストバージニア州 Weir-
tonにある高校のクラスにお願いした。

相手クラスは Weir High School の Japanese 1 のクラスで18名の学生から構成されていた。年齢的にも9年生から12年生と本校の2年生と変わらず、また何よりも日本語を学ぼうとしている学生であり、文化的交流が図れると期待した。

3.2.3.2 事前打ち合わせ

まずパートナーの問題である。本校の学生は36名、相手クラスの人数は18名ということで、本校の学生2名をアメリカの学生1名に振り分けてもらうことにした。ただし、本校の学生2名が協力してメール作成をするのではなく、本校の学生にとっては1対1のやり取りになるようにしてもらった。

メール作成の頻度については、相手クラスは毎日授業があるが、文科ゼミナールの授業があるのは月曜日だけなので週1回のペースでお願いした。

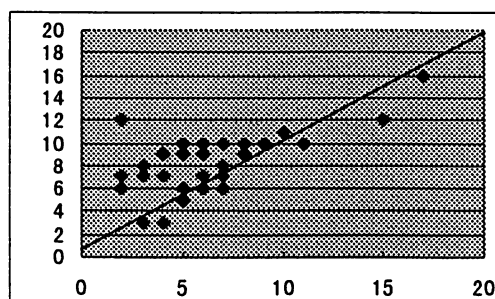
通信内容は異文化理解でそれぞれの意見が一致した。本校の学生にはこの通信のテーマは「アメリカ文化理解と日本語・日本文化紹介」と説明し、アメリカ文化で自分が知りたいトピックを考えさせた。少なくとも3ヶ月間の電子メールのやり取りになるため複数のトピックとそれに付随した質問を考えさせた。

3.2.3.3 進行と成果

電子メールの進行は、相手校からパートナー決定の連絡が遅れたため本校学生がそれぞれ自己紹介を相手校の先生に送りそれをパートナーに転送してもらうことによって始めた。その後パートナーから本

校の学生に連絡が入り通信開始となった。それ以降の進行は学生に任せ、自分の知りたい情報をいかにして聞き出すかを念頭に置きながら通信をするように指示した。

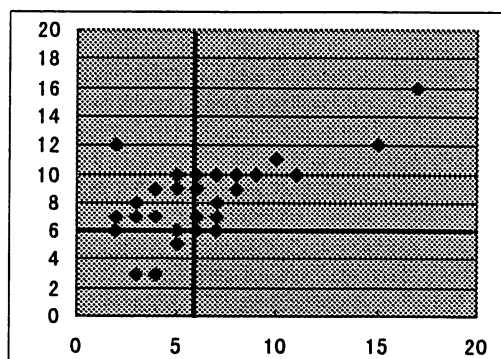
海外通信にあてた授業時間数は12時間で、メール交換数をグラフにすると以下ようになる。縦軸は本校学生の送信数、横軸は受信数である。



基準線(斜線)より上方にある点は本校の学生の方が積極的にメールを出したケース、基準線上の点は両者とも同数のメール数を出したケース、基準線より下方にある点は相手の学生の方が積極的にメールを出したケースである。

このグラフから本校の学生の方が積極的にメールを送信しており、このプロジェクトに対して意欲的だったことがうかがえる。メール数を平均すると本校の学生が送ったメール数は平均して8.1通、一方相手から送られてきたメール数は5.7通であった。

上述したように海外通信をしている期間の授業時間数は12時間であった。そのため6通ずつ以上のメールを送り合ったペアを「成功したペア」と定義した。定義理由はメールを相手からもらい、それに対する調べものをし、次の週に送信すると仮定すると授業時間数の半分の数を送ることができれば良いと考えたからである。



この定義に従うと全ペア36組中「成功したペア」は17組、本校の学生が消極的なために「成功しなかったペア」はなし。相手クラスの学生が消極的な

めに「成功しなかったペア」は15組、両者とも消極的なために「成功しなかったペア」は4組であった。この定義は単純にメールの数での定義であるが「成功したペア」か否かが大きな影響を与えていることがアンケート調査でうかがえる。

4 アンケート及び考察

このセクションでは学生に行ったアンケートについて報告しその考察を行う。アンケート回収は36名中35名であった。

4.1 学生の海外通信に対する変化

この授業を受けたことで、海外通信に対してどのような心的変化が生じたかを調べてみた。最初に事前アンケート(1)と事後アンケート(2)を比較検討してみよう。

(1)あなたは英語でメール交換をする自信がありますか。

- a. はい (19人)
b. いいえ (16人)

(2)海外通信を始める前と比べて、海外通信への自信がつけましたか？

- a. はい (30人)
b. いいえ (5人)

(1)と(2)の対比から海外通信が自分でできたことに対して大いに自信を深めたと言える。実際に最初の2, 3回までは送信する前に筆者らの文法チェックを受けたいという学生が多くいたがその後は自分達でこなしていた。

アンケート(2)で(b)「いいえ」と答えた5名については相手からのメール数が少なく平均3.8通(全体平均5.7通)であった。僅か2通しかもらってない学生も2名おり、他の学生との格差が大きかった。「成功したペア」となった17名に限って言えば、(2)に対して16名が(a)「自信がついた」と回答している。

(3)あなたにとって海外通信はためになりましたか？

- a. はい (33人)
b. いいえ (2人)

(4)今後、新たに海外通信を行いたいと思いますか？

- a. はい (29人)
b. いいえ (6人)

(1)から(4)の質問を通して言えることは少なくともメールを頻繁にやり取りした学生達は海外通信に関して自信を持ったと言えよう。また今後新たな電子メール交換にも意欲的な面がうかがえる。(4)のアンケートに関して「成功したペア」に限って言えば、17名全員が(a)「はい」と回答している。

4.2 異文化理解へ向けて

次に異文化理解についてのアンケートに関する結果と考察である。

(5)知りたいと思っていた情報を十分に得ることができましたか。

- a. はい (17人)
(i)十分にできた (1人)
(ii)ある程度できた (4人)
(iii)少しはできた (12人)
b. いいえ (18人)

この点に関しては芳しい結果は得られなかった。この原因として2つのことが考えられる。第一に相手からのメール数が少なく、獲得しようと思っていた情報を十分に得られなかった学生が多くいたことである。

次に相手が本校の学生が送った質問に対して、真摯な態度で書いてくれないケースがあったことである。相手がいることなのである程度は仕方がないが自分の思ったとおりにことが運ばない学生もみられた。

(6)あなたはE-PALと友達になれたと思いますか。

- a. はい (25人)
(i)十分になれたと思う (2人)
(ii)ある程度なれたと思う (12人)
(iii)少しはなれたと思う (11人)
b. いいえ (10人)

(5)と比較してみると、獲得しようと思っていた情報は十分ではなかったが、個人情報はある程度獲得した学生が多かったように思える。この点に関して決して否定的に見るのではなく人と人のつながりという点でむしろ肯定的に見ている。

4.3 英語力に対する変化

ここでは英語力に関して学生が何らかの変化を感じているか調査してみた。

(7)この授業を受ける前と比べて英語を読む力が向上したと思いますか？

- a. はい (30人)
 (i)かなり向上した (4人)
 (ii)ある程度向上した (11人)
 (iii)少しは向上した (15人)
 b. いいえ (5人)

(8)この授業を受ける前と比べて英語が通じるという自信がつけましたか？

- a. はい (33人)
 (i)とても自信がついた (4人)
 (ii)ある程度自信がついた (14人)
 (iii)少しは自信がついた (15人)
 b. いいえ (2人)

(7)はリーディング、(8)はライティングに関するアンケートである。いずれの回答でも自分の英語力に今回のプロジェクトの効果が現れていると実感している学生が多くみられる。もちろん否定的な回答をした学生もいるが、この点に関しては受け取ったメール数が影響していると考えられる。

次に英語を書くことに対する心的変化を調べた。

(9)この授業を受ける前に比べて気軽に英語を書くことができるようになりましたか？

- a. はい (32人)
 (i)とても気軽に書けるようになった (5人)
 (ii)ある程度気軽に書けるようになった (12人)
 (iii)少しは気軽に書けるようになった (15人)
 b. いいえ (3人)

(10)この授業を受ける前に比べて自分の英語の間違いに気にならなくなりましたか？

- a. はい (24人)
 (i)全然気にならなくなった (1人)
 (ii)あまり気にならなくなった (14人)
 (iii)少しは気にならなくなった (9人)
 b. いいえ (11人)

(11)ネイティブスピーカーでさえ英語の間違いをすることに気がつきませんでしたか？

- a. はい (24人)

b. いいえ (11人)

筆者らは学生にこのプロジェクトで文法上の間違いにとらわれ過ぎずに情報を発信する態度を育成したいと願っていたが、アンケート(9)(10)の結果を見る限りその方向性は間違っていなかったと考えられる。(11)との関連で言えば、(11)で(a)「はい」と答えた24人のうち、(10)で(b)「いいえ」と答えた学生はわずか4名であった。

さらに(11)で(a)「はい」と回答し、かつ「成功したペア」となった学生は12名おり、そのうち11名が(10)では(a)「はい」と回答した。つまり返信を多く受け取った学生ほど気軽に書けるようになり、自分の文法の間違いが気にならなくなったと回答している。逆に否定的な回答をした学生は総じて受け取ったメール数が少なかった。

4.4 その他

最後に記述回答による質問とその中で多かった回答を挙げておく。

(12)この授業を通して自分の能力が伸びたと思う点を書いてください。

- ・タイピングが早くなった (19件)
- ・英文が書けるようになった (9件)
- ・英語に対する不安がなくなった (7件)
- ・パソコンの使い方が分かった (6件)
- ・パソコンに対して不安がなくなった (6件)
- ・積極的に辞書を使うようになった (4件)
- ・英語が読めるようになった (4件)

5 反省と今後の課題

全体的に見て本校の学生は意欲的にこのプロジェクトに取り組んだと判断している。ただし、その都度返事をもらっていた学生ももちろんいたが、一方で返事が少なかった学生がいたことは残念だった。

この問題について筆者らは学生に相手の先生に事情を伝えさせることによって解決を図らせようとした。問題解決も異文化理解の一つと考えたからである。また何よりも自分の力で問題を解決したときの充実感を味わえなかったからであるが、この点に関して今後どう対応していくべきか検討が必要となるだろう。

6 おわりに

この授業は文科ゼミナールという本校独自の授業時間を使って行ったが、筆者らは一般の英語の授業でこのような自己表現を实践する場を増やす必要性を感じている。なぜならば、「成功したペア」に属する学生のアンケート回答から判断して、自己表現の機会が多ければ英語学習に効果があると結論づけられるからである。

最後に、相手クラスの Betty Smith 先生及び筆者らが授業をする際に常に助けていただいた本校電算機センターの神智也氏と岡部克利氏に感謝の意を表す。

参考文献

- ウォーショー, M., 英語教育のための E-MAIL 洋販出版, 1997年
- 山内 豊, インターネットを活用した英語授業, NTT 出版, 1997年
- 朝尾幸次郎・斉藤典明, インターネットと英語教育 (英語教育96.11月号別冊), 大修館書店, 1996年
- 佐藤 孝 他, 秋田高専における文科ゼミナール, 高専教育22号, pp. 215-224, 国立校等専門学校協会, 1999年
- 渡部 睦浩, インターネットと英語教育, 英語教育と英語研究 第14号, pp. 81-99, 島根大学教育学部英語科編, 1997年

〈実践例〉

11/24/1998

Hello Again!

How are you? I am fine. I am writing this on Tuesday because the rest of this week we are off from school because of a holiday called Thanksgiving. It is celebrated because our English ancestors got help and food from the Indians, and we gave thanks and peace in return. It is going to be celebrated on Thursday, but my school is nice so it is giving us a few extra days off. What are a few of the holidays you celebrate in Japan? I look forward to your reply. See you Later!

-Jim-

11/30/1998

Hello, Jim. How are you? I'm fine.
This week, there are exams in my school. I have experienced the test for six times. The test is very difficult. But, I have got full marks for twice. They are measure and math. How about you? By the way, What are you interested in now? I am interested in music. I often listen to music. Japanese music is very good. Do you know any Japanese musicians? I want to know some American musicians. Please tell me.
Do you interested in Japanese language? If you said yes, I'll teach Japanese.
I am looking forward to your answer. See you!

Shin'ichi

12/4/1998

Hey Shin!

How are you? I'm fine. I have really hard tests I had to take too, if was called the PSAT. I got my results back today, and I got above average scores. My parents are going to be happy. And good luck with your tests, I hope you do well. As for music, I love music. I'm sorry, but I don't know any Japanese musicians. I like to listen to rock and roll, alternative, and some rap music. Some artists over here are Offspring, White Zombie, Korn, and Rammstein for rock and roll, Verve Pipe, Cranberries, and Limp Bizkit for alternative, and Master P, Tag Team, and Bone Thugs 'n Harmony for rap. I like to play my music with a lot of bass, it makes it rumble and sound louder. I would like to know some of the musicians in Japan if you'll tell me about them. I am also very interested in Japanese, and I am going to take it again as a main course when I go to college. I also want to visit Japan one day and study culture. If you could teach me a few phrases or sentences that are actually useful to me, unlike what I have been taught in class so far, I would be very thankful. If there is anything in English you want to learn how to say, just ask. Well, bye for now. I'll write again soon.

-Jim-

12/7/1998

Hi Jim! How are you? I'm fine.

I got two examination papers. The result is quite good. I hope other tests are also good grade.

I'm interested rap music, but actually, rap music is very difficult.

Japanese rap music is very fast, so Japanese rap music is also difficult. And of course I want to know some American musicians.

By the way, I tell some Japanese phrase. You say "Good morning" in the morning. In Japan, it say "O ha yoh", and I say "Ko n ni chi wa".

"Ko n ni ti wa" means "Good afternoon". And "Good evening" is called "Ko n ba n wa". What do you want to know next time?

I'm looking forward your answer. See you!

Shin'ichi